カヌー
竹下百合子選手

聞き手／武藤泰明

連載第8回はキッコーマン所属のカヌー選手・竹下百合子さんに話を聞いた。

武藤　竹下さんはアスナビ※開始初年度の採用ですね。

竹下　学生時代は親や家族に支えてもらって、海外遠征も含め競技を続けてこられましたが、卒業後はどうやって競技を続けていこうかと考えていたんです。そんなとき日本オリンピック委員会（JOC）に相談したらアスナビのことを教えてもらったのでエントリーしました。

武藤　キッコーマンにはカヌーについてのナレッジはなかったと考えてよいですか。

竹下　はい。ですから、カヌーで採用されたときはものすごくうれしかったです。世間ではマイナーな競技とされていましたから。

武藤　今、日本のカヌー人口はどのくらいですか。

竹下　ジャパンカップが年間7戦あり、多いときで小学生からシニアまで合わせて130名くらいのエントリーがあります。

武藤　学生時代は用具や器材、海外遠征費も全て自腹ですか。

竹下　はい、ほぼそうです。ただ、2008年に北京オリンピックで4位という結果を残すことができてからは、JOCからの補助金が増えました。

武藤　ワールドランクによって、海外遠征費を全額出してもらえる選手から自腹の選手までいますね。お金がなくなると同時に競技生活が終わるという悲しい現実があります。

竹下　最もお金がかかるのはやはり海外遠征です。今は会社からのサポートがあるので助かりますが、カヌーは日本に練習環境がないのでどうしても1年の半分は海外に行かないといけません。ワールドカップはドイツやスペインなど主に欧州で開かれます。人工で作られたコースで行われることがほとんどで、周りをコンクリートで固め、波や川の巻きも人工的に作ります。その施設が日本にはないのです。

武藤　就職の前と後で、競技者としての生活や意識に何か劇的な変化はありましたか。

竹下　会社の皆さんに応援をしてもらっているので、きちんと結果を残さなければいけないという責任感が強くなりました。

武藤　カヌーや他競技で世界選手権やオリンピックを目指している後輩たちにアスナビを薦めたいと思いますか。

竹下　もちろん薦めますが、そのぶん覚悟も必要だと思います。

武藤　その覚悟というのは結果を出すことですか。

竹下　はい。それが一番大きいですが、自分が入社したことで会社にどうプラスになるかも考えないといけません。

武藤　ご自分がいることで何がプラスになると思われますか。

竹下　私自身、スポーツで頑張っている選手を見て元気や勇気をもらうことが多いので、シンプルではありますが、そういう活力のようなものを感じていただきたいと思っています。

武藤　アスナビ採用である竹下さんは、企業にとって「このやり方ならスポーツを支援することができる」という新たなロールモデルになっていくと思います。ありがとうございました。

※企業と現役トップアスリートをマッチングする、JOCの就職支援制度。

Point of View
セカンドキャリアまで見通した選手の雇用

JOCが運営するアスナビの特徴は、競技引退後も社員として仕事をすることを前提に、アスリートを雇用しているところである。競技レベルの高い企業スポーツの多くは、実質的にプロ化し、仕事をせず、競技引退後は退職するようになった。これと比べると、アスナビは企業スポーツの原点に一種回帰しているといえるのだろう。

雇用継続が前提なので、企業の採用の「目線」は、おのずと厳しくなる。競技能力が高ければそれでよいということではなく、いわば文武両道が求められる。選手を送り出す側に属する者として、身の引き締まる思いである。

武藤泰明（むとう・やすあき）
早稲田大学スポーツ科学学術院教授。東京大学、同大学院（修士）卒。三菱総合研究所主席研究員を経て現職。専門はマネジメント。

⬆ キッコーマンの応援団

➡ 竹下選手が出場するスラロームは激流の中決められたゲートを通過してタイムを競う

竹下百合子
（たけした・ゆりこ）
カヌー・スラローム女子カヤック選手。2008年、早稲田大学在学中に北京オリンピック4位入賞。2011年キッコーマン入社。

イラスト＝太田丈晴